

## 27年度版教科書つれづれ 10 「くちばし」(光村図書・小学1年)の巻

加藤 郁夫(読み研事務局長)

「くちばし」は光村図書・小学1年(上)の説明文である。1年生の子どもたちが、初めて出会う説明文といってよいであろう。この教材は23年度版(以下旧版)と27年度版(以下新版)で、一ヶ所大きく変わっているところがある。先に、どのような変更があったのかを示す。

いろいろな とりの くちばしの かたちを みて みましょう。

新版には、文章の冒頭にこの一文が新しく付け加わったのである。たかが一文が加わっただけと思われるかもしれない。しかし私は今回の改訂は大きな問題を持っていると考えている。その理由を述べるのがこの文章の目的でもあるのだが、説明的文章の指導の系統性と深く関わった問題と私は考えている。

旧版は、題名のあと、次の文章があり、下にくちばしの絵が書かれているページから始まる。

さきが するどく とがった くちばしです。  
これは、なんの くちばしでしょう。

ページをめくると、問いの答えが書かれているようにレイアウトされているので、このページは教科書の左のページになるわけだが、新版は前出の一文が加わったことで、教科書見開きの右ページに題名と「いろいろな とりの くちばしの かたちを みて みましょう。」の一文が、左のページに従来通りのページが来るという形になっている。

要するに、新版では「はじめ」の一文が付け加わったのである。旧版と新版の構成を整理しておく以下のようなものである。

旧版……「なか」だけの構成。「なか」は「きつつき」「おうむ」「はちどり」の三つに分かれる。  
新版……「はじめ—なか」の二部構成。「なか」は旧版と同じ。

「はじめ」の一文を加えることで、文章が唐突に始まるのではなく、これから何を述べるかをわかりやすく示されているとはいえる。小学一年生の最初の説明文が、このような形式をとるのは他社でも見られる。東京書籍の「どうやってみをまもるのかな」も、「はじめ—なか」の形式をとっている。

確かに、「はじめ」の一文が加わることで、文章としての体裁はよくなったといえるかもしれない。しかし、私はこの改定は教材配列の観点からみて後退であると考えている。

以下にその理由を、小学1年生における説明文の読解指導の順序性と関わらせて述べる。

はじめにも述べたが「くちばし」は、光村図書『こくご 一 上』の48ページから始まる文章で、小学1年生の最初の説明文といってよい。説明文の読解のはじめでは、大きく二つのことを教えていくのがよいと私は考えている。一つは、「問い—答え」の関係の読み取りであり、もう一つは、文章のまとまりの読みとりである。

「問い—答え」の関係を読みとりは、子どもたちにとってこれから高校・大学そして社会人になっても続いていく説明的文章の読解の基本となることである。説明的文章は、筆者に伝えたいことがあって書かれる文章である。言い換えれば、筆者の問題意識のもとに書かれる文章である。その

問題意識こそが「問い」を成り立たせている。

説明的文章における「問い」は、筆者がわからないから問うのではない。筆者はわかった上で、読者の注意や関心をそこに惹きつけようとして問うのである。言い換えれば、問いの形を取りながら筆者は自らが述べようとするに、読者の目を向けさせようとしているのである。したがって、必ずしも問いの形をとらなくてもよい。学年が進行するに従って、問いの形を取らない問題提示を持つ説明的文章は多くなっていく。私たちが説明的文章を読むときの基本は、筆者の問題意識がどこにあるのかをつかむことである。何について、あるいは何を述べようとした文章なのかという、大きな方向性をつかめると、文章の理解はグンとしやすくなる。

もちろん小学 1 年生に、いきなりそこまでの理解を求めるものではないが、「問い—答え」の関係の読みとりがどういう意味を持つのかという見通しは、1 年生を担当する先生方にももっておいでいただきたいと思うのである。「問い」を意識することで、答えを考えようとするし、文章の中に答えを探していこうとする読みができるようになっていく。その最初となる教材が光村図書ではこの「くちばし」なのである。だからこそ、「問い—答え」をできる限りシンプルに教えることが大切になる。

そしてもう一つ、文章のまとまりの読みとりである。これはこの後、少なくとも高校までは（あるいは大学入試も）しばしば問われることになる、「この文章を 3 つに分けよ」といった問題の基本となることである。文章をいくつかのまとまりでとらえることができる、そういう力の第一歩となることを「くちばし」で教えていくのである。

「くちばし」は、「きつつき」「おうむ」「はちどり」の三つの鳥の嘴について述べた文章である。つまり、鳥の種類で文章はおおきく三つに分かれる。三種類の鳥が出てきたことがわかり、それぞれの文章のまとまりが読み取れることが大事になる。最初に触れた新版の「はじめ」の一文が加わることで、文章のまとまりは四つになる。しかし、「いろいろな とりの くちばしの かたちをみて みましよう。」という一文は、他の三つのまとまりとは、質が異なるまとまりである。旧版が文章構成における「なか」だけの文章であったのに対して、新版は「はじめ」が加わることで「はじめ—なか」の二部構成になった。「なか」だけを読んで三つに分けると、「はじめ—なか」の読み取りも合わせてするのでは、当然のことながら後者の方がより複雑な読みとりとなる。1 年生の最初の説明文で、そこまでを求める必要はない。わざわざ難しくするよりも、「問い—答え」の関係を読み、まとまりの読みがしっかりとできるようにしていくことに重点を置く方がよいと私は考える。

この段階で、文章の「はじめ」の役割をきちんとおさえる必要はない。しっかりと「問い—答え」をおさえること、まとまりをきちんと読みとり、なぜ三つのまとまりになるかを子どもたち全員が理解できるようにしておくことがこの教材の役割である。その意味からいって、「はじめ」の一文を付け加えたことは、文章構成を複雑にし、この教材で何を教えていくのかという重点を曖昧にしたという意味で、私は後退だと考えるのである。

そうはいっても、新版では「はじめ」が付け加わってしまったのである。子どもたちにこの部分だけ見ないようにしなさいとは言えない。

ただ、ここまで述べてきたことからわかっていただけだと思うのだが、「問い—答え」を意識させること、そしてまとまりの読みに重点を置いて授業を進めることが大事である。「はじめ—なか—おわり」の三部構成をこの段階で教える必要はない。「はじめ」を教えるにしても、そこに重点

を置く必要はない。さらっと教えておけばよい。二学期に入り「じどう車くらべ」に入った時に、再びこの「くちばし」を振り返って、「いろいろな とりの くちばしの かたちを みて みましよう。」が「はじめ」の役割をしていたことを確認すればよいのである。

最後にもう一度整理しておく。小学 1 年生の最初の説明文では、「問い—答え」の関係の読みとりと、まとまりの読みとりの二つに絞ったほうがよい。そのため、「はじめ」や「おわり」の文はあえて付けず、「なか」だけの文章のほうがよいと考える。二学期に入って子どもたちが二度目に出会う説明文で「はじめ」が出てくればよいのである。子どもたちにしっかりした読みの力をつけていくためにも、教科書の教材は指導の順序性をもっと意識して作成される必要がある。